

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第19号 1999年11月16日(火)

発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
TEL/FAX 078-803-5565

目次	
特集!! 歴史学研究会総合部会..... 1	兵庫津の歴史研究、新しい段階に
報告と問題提起/馬場義弘・奥村弘・辻川敦	藤田明良...10
参加記/藤實久美子	地方史研究協議会大阪大会に参加して
台湾大地震被災文化財保全の	大国正美...10
状況についての現地レポート 奥村 弘... 8	文献情報.....11
	兵庫津連続市民学習会ほかのお知らせ.....12

特集!! 歴史学研究会総合部会報告

テーマ 市民社会における史料保存と歴史学 - 阪神・淡路大震災と史料ネット -

開催日 1999年9月18日(土)

場所 明治大学リバティータワー1073教室

参加者 約30人

去る9月18日、上記のとおり歴史学研究会総合部会において、史料ネットの活動経験と教訓にもとづいた報告と討論を行ないました。今回は、この総合部会の内容を特集して紹介します。日頃接することが少ない関東方面の皆さんのご参加を得て、共通認識をつくるための場を持つことができ、場を設定して下さった歴史学研究会担当の皆さんには、感謝申し上げたいと思います。なお、歴史学研究会月報に研究会記録が、また『歴史学研究』本誌にはよりくわしい報告内容が掲載される予定です。

当日の参加人数は、残念ながら主催者サイドの期待を下回るものでした。近代史や史料保存関係の他の研究会日程と重なったこともあったようですが、震災のインパクトが風化していることや、あるいは史料ネットの提起している問題は関係者が考えるほどには周囲からは評価さ

れていない、ということなのかもしれません。

報告を受けての討論は、保坂裕興氏の司会により行なわれました。論点のすべてをここで紹介する余裕はありませんが、史料ネットの組織や財政の実情、どういう地域を調査してどういう史料を保全したのか、保全した史料は今後どうなるのかといった質問があり、さらに歴史研究者の役割、アーキビストとの関係・役割分担、歴史研究や史料保存における、史料ネットのようなボランティア団体と行政や市民との関係などについて、議論がかわされました。関東大震災研究や記録保存状況の紹介もあり、災害研究の成果を生かしていくことの必要性も提起されました。

今回議論されたことも踏まえて、さらに史料ネットの活動総括の作業を進めていきたいと考えています。

“史料ネット News Letter”購読と募金のお願い

史料ネットの活動に、平素からご協力いただき、ありがとうございます。今年度も、引き続き、ご協力をお願いしています。“News Letter”は年4回発行、年間購読料(郵送費)500円にて受け付けています。下記支援募金口座に「ニュース郵送購読希望」と明記してお振り込みいただくか、あるいは電話、FAX、e-mailのいずれかの方法で史料ネットセンターまでお申し込みください。

史料ネット活動支援募金 (郵便振替)

名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009

史料ネットの活動記録と、
これまで議論してきたこと
馬場義弘

この報告の目的は、史料ネットの活動の軌跡を振り返り、その思想と行動を概観することにある。史料ネットの今後の活動形態や運営体制について検討する際の参考になれば幸いである。

1 初年度の活動

レスキュー活動 史料ネット結成の目的は、被災史料の救出にあった。被災した所蔵者に代わって、全壊・半壊の家屋から史料を回収し、自治体の関係機関に一時保管するというものであった。この活動は最初の2年間で41件を数え、延べ500人を越えるボランティアが参加した。初期のレスキュー活動はN G O 救援連絡会議文化情報部や阪神・淡路大震災被災文化財等救援委員会への協力というかたちで行われた。

最初に問題となったのは、参加者の安全である。解体作業と並行して行うなどの危険な作業が多かった。そこで危険を冒してまでの救出作業はしないことが確認された。また連絡ミスや資材の不備など、活動するなかでの失敗や不手際もあったが、試行錯誤を続けながら救出活動のノウハウをつかんでいった。

こうしたなかで重要なのは、救出活動の意義の自覚化がなされたことである。すなわちレスキューはたんなる被災史料の保全活動ではなく、被災者の復興支援の一環であるという位置づけが確認され、活動の基本方向となった。

やがて史料ネットが主体のレスキュー活動が多くなる。基本姿勢としては自治体に対する支援協力という立場をとった。自治体との信頼関係を築くことに配慮しつつ、消極的な自治体とも交渉・説得を行い連携するようつとめた。

巡回調査 ところでレスキューの際に「近所で古文書を焼いていた」とか「骨董品屋が来て蔵ごと買い取っていった」という話が聞かれた。そこでネット事務局への要請を待ってそれに対応するだけでなく、こちらから救出の対象となる被災史料を発見するため被災地を巡回しようという声が出された。

この巡回調査は、1995年3月29日に伊丹市（～4月）で始まったが、その後神戸（4～10

月）・宝塚（6～9月）・明石（7月）・川西（9～11月）の5市域にわたって合計37回実施し、延べ326人が参加した。

巡回調査について、当初は「こんな大変な時に史料のことなんて」と反発されるのではという不安があった。しかし実際にはネットの趣旨を理解し、好意的に受け止められることがほとんどであった。ただ緊急的な救出対象の発見という意味では十分な成果を上げたとはいえない。訪問先では「ついこの間捨てました」「もう少し早く来てくれたら・・・」との回答に接することが多かった。開始が遅かったのである。

しかしこの巡回調査によって史料ネットは新たな課題に向き合うことになった。それは「歴史資料」とは何かということについて、研究者と住民との間に共通認識がないことに気づいたことから始まった。史料の破棄がめずらしくないことも明らかになり、このことは当初「ギャップ論」として調査の参加者にショックを与えた（本ニュース第4号所収の朝日新聞記事「震災で問われる歴史意識」参照）。そして研究者自身が身近な史料の価値について説明する言葉を持っていなかったことに思い至ったのである。市民講座 そこで史料ネットは、地元住民や自治体との日常的な連携協力をめざして「震災復興・歴史と文化を考える市民講座」を企画する。市民とともに被災地の歴史や文化を見直し、復興も含めたわれわれの将来へと活かしていく、という趣旨であった。市民講座はその後も被災地各地で開かれ8回を数えている。さらに98年9～11月には神戸市東灘区森地区において連続ミニ市民講座を計4回開催している。

この市民講座は、一方通行の講演会ではなく、質疑応答の時間をとり、また意見・感想文用紙を配付して運営の参考にしている。また自治体との連携を重視するが、それは自治体を「その気にさせる」という立場から来ている。講演の合間には、史料の展示説明会も合わせておこなひ、それが参加者との交流の場となった。

2 課題の多様化～1996年以降～

終息計画の変更 史料ネットの活動は、当初は短期的なものと考えられていた。1995年9月の時点でも、翌年3月には終息する計画であった。ところが96年1月になって存続が決定され、4月から「歴史資料ネットワーク」に改組される。なぜそうなったのか。史料ネットの改組を告

げる「ニュースレター」第5号(96年6月)には取り組むべき課題として、震災処理の継続、被災地の歴史・文化を知る、普遍的課題に向けて、の3点が掲げられている。このうちの説明として、「活動を通じて明らかになった、歴史学と社会をめぐるより普遍的な課題に取り組み、その経験を全国に発信」するとある。

ここには次のような問題意識があった。すなわち「今の活動は、目先の史料の救出に止まらず、不特定多数の史料を包含し続ける地域社会をどう構築するのかという課題、当初見えなかった本来の課題を発見したゆえに続けている活動である。(中略)今問われているのは、アーキビストや研究者が、こうした社会作りとどうかかわるのかであり、史料ネットの目指す方向は今後も追い続ける必要があると考えている。」(大国正美「被災史料の救出と戦後史料保存運動の再検討」『歴史科学』146号、96年9月)というものであった。

活動の多様化 こうした問題意識に沿って史料ネットの活動は多様化する。「震災記録の保存と編さんに関する研究会」(96年2月～)ではアーカイブスの問題に取り組む。「被災地の遺跡を考える見学会」(96年11月～97年7月までに7回)や「街の石造物から歴史を探るウォーキング」(96年12月～)なども開催するようになった。

また古書市場流出史料問題への取り組みとして自治体の担当者と呼んでの「阪神大震災後の古書市場に関するアンケート調査結果報告並びに懇談会」(97年7月)を実施した。

サブプロジェクトの展開 さらに史料ネットのボランティアが地域住民とともに地域の歴史を掘り起こす企画が各地で始まった。西宮・門戸の歴史資料を守る会(96年3月～)、宝塚の古文書を読む会(96年5月～)、尼崎戦後史聞き取り研究会(96年9月～)、猪名荘遺跡を学ぶ会(97年11月)などである。

そこには「史料ネットが活動する中でつられてきた、歴史学会や研究者、学生・院生、自治体関係者、また地域で歴史研究にたずさわる郷土史家や市民とのネットワーク。これを今後も維持発展させ、歴史文化に関わる様々な取り組みや運動とその情報を交換し合い、刺激しあう。そうしたいわば歴史ネットワーク機能を日常的なものとして充実させていく必要がある」(佐賀朝「阪神・淡路大震災と被災歴史資料救

出活動の展開」『大阪春秋』82号、96年3月)という思いがあった。

おわりに～普遍的課題へ向けて～

かつて連絡会議の席上、被災史料整理をボランティアですべきかどうかで意見が割れたことがあった。私は自治体からバイト料が出るようにすべきだという意見だったが、それは本来行政がすべきことを補完しているという意識から来ていた。「被災地域の歴史資料・文化財の保全は行政の職務であり、倒壊家屋から救出された史料も、最終的には該当自治体が保存・公開の責任を負うべきである」というのが史料ネットの立場であった。(藤田明良「阪神大震災における史料救出・保全活動 - 史料ネットの議論と活動 - 」『日本史研究』416号、97年4月)。しかし今では、そういう一種の「お上意識」は払拭されつつある。史料ネットが目指すのは行政と対等のパートナーシップなのである。

被災史料のレスキューから始まった史料ネットの活動は、その後予想をこえて多様な展開を見せた。それは「動く」ことによって次々と明らかになってきた課題への果敢な取り組みであった。史料ネットの活動の特徴は、研究活動に収斂せずに運動として展開したところにある。それは歴史研究者にとっては震災体験を通して現代社会に切り込む回路の一つとなった。

(ばんばよしひろ、滋賀大学教育学部講師)

問題提起1

時代が求める歴史研究のあり方
とは - 史料ネットの活動から考える -
奥村 弘

日本史研究会特設部会以後の史料ネットの活動および総括作業の中から、いま日本社会の中でのどのような歴史研究のあり方が必要とされるのかを問題提起する、これが私の今回の報告のねらいでした。したがって今回の問題提起は、史料ネットそのものの見解ではないことを最初にお断りしておきます。

外岡秀俊氏は『地震と社会 - 「阪神大震災」記 - 』(1997/1998年、みすず書房)の中で、阪神淡路大震災後の広範な分野であらわれたボランティア活動について二つの特徴をあげています。ひとつは日常生活の延長線上にありながら、本来、日常生活から一歩踏み出す、ある意味では

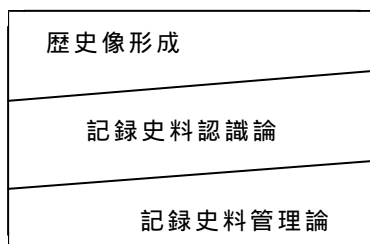
自己の分限を越える自発的な活動であること。もうひとつは、被災地に日常では投下できないエネルギーを集中的に投下する活動であったことです。この点では、史料ネットの活動も同様な位置づけができます。若手の研究者が自己の分限を越えて被災地と対峙した時、凝縮した状況の中で浮かび上がってきた解決すべき課題とその方法について、広く共有しうるかどうかを報告の重点におきました。

具体的には、歴史像を研究者と社会がいかに獲得していくかという問題を三つの点から深める形を取りました。第一は、歴史資料と歴史研究について、第二は歴史学の実践性をめぐって、第三は、歴史学の方法についてです。

第一の問題は、日本史研究会の特設部会でも問題にしたことであり、史料をつかって、「完成された」歴史像を歴史研究者が市民に返していくという形での歴史像形成でなく、史料の発掘・整理・保存を含めた歴史像の形成過程そのものが、なんらかの形で市民にも共有されることが重要であることを主張しました。

今回は、これに関連してとくに史料学を歴史学から分離する考え方について批判を行いました。たとえば安藤正人氏は、『日本通史 別巻3 史料論』の中で「アーキビストとは、社会公共から、人類の『共同記憶』の選別と保存・管理という困難な任務を委託されたプロフェッションである」（374頁）と述べています。しかし、私は人類の「共同記憶」を次世代に引き継ぐことは、どのような第三者にも委託できるようなものではなく、社会に対する歴史文化全体の課題と考えます。史料管理・史料認識・歴史像形成の三つの視点は切りはなしえないものであり、歴史文化に関わる諸個人が、アーキビスト的性格が強いが研究者的性格が強いかは、この三点のうちどこに比重を強く置くかによると考えるべきではないかと述べました(下図参照)。

第二は、前記のことと関連した歴史研究と現



歴史研究者的性格 アーキビスト的性格

代社会の関係、歴史学の実践性についてです。すでに述べたように、歴史研究は、その基本となる歴史資料の保全を社会そのものに求め、また形成された歴史像を次世代全体へと引き継いでいくことを求める学問です。とするならば、現代の歴史研究は、歴史研究を支える市民社会を形成していきながら、それを基礎として歴史研究を進めるといふ、独自の市民社会形成に対する実践性を持っているのではないかということをお話ししました。

これは、端的に言えば市民社会における歴史文化の領域であり、ここでは歴史像形成過程に対する市民的な合意、さらにはそれ自身への市民の参加が問題となります。そしてこのことは、理念としてのみ存在するのではなく、現実の課題として提起されはじめているのではないかということをお話しした。大震災では被災者や救援活動に携わった人々が多様な形で膨大な震災についての記録を残しました。おそらく、これだけの記録が残されたことは、日本における災害の記録にはなかったことであり、このことは過去を未来へと繋いでいくことを正面からとらえようとする文化が日本社会の中で育ち始めていることをしめしているのではないかと。

第三は、歴史学の方法についてですが、これを具体的に論じると通信の中にはとても納めきれないので、詳細は別稿に譲り、結論のみ記載します。すでに述べてきた歴史学の現代的な課題を、最近の「国民国家批判の歴史学」という方法では、十分受け止めることができないのではないかという批判です。ひとつは、歴史像形成過程そのものの共有という問題を抜きにして、ある歴史像(国民国家の歴史像)の虚構性を、別の歴史像で批判することには限界があるということ、もうひとつは、歴史学の主題の立て方が、『国民国家 = 「近代」』と、それとは異なるものという形で単純化されるため、阪神淡路大震災によって現れたような多様な課題を歴史学の主題として組み込み、実体分析を深化させることができないのではないかという点です。

討論では、歴史資料を巡る問題が議論の中心になりましたが、印象に残っていることは、歴史研究者が、歴史資料の発掘、保全、史料整理、史料概要の作成などを、歴史研究において固有の位置を占めるものであると評価していな

いのではないかという疑問が、歴史資料保存機関に勤務されている方から出されたことでした。本当にそうなのかどうか、問題をそのように捉えていいのかわかるか、歴史学に携わる人々の間でこの問題が、多様な形で率直に議論される必要があると感じました。（おくむらひろし、神戸大学文学部助教授、史料ネット代表幹事）

問題提起 2

震災の経験から史料保存のあり方を考える

辻川 敦

震災後の被災史料保全活動に始まる史料ネットの取り組みの経験と教訓は、日本における既存の史料・文化財保存に対して、根本的な見直しの必要性を提起していると考えているので、その点について歴研総合部会で問題提起を行なった。阪神・淡路大震災はあくまで大規模災害の一事例であるが、同時に現代都市社会のかかえるさまざまな本質的課題をあきらかにしており、歴史・史料の分野においても、震災とその後の経験を通して普遍的な問題が提起されていると考えるからである。

被災史料保全活動の教訓は、史料の防災・災害対応の問題として狭くとらえられ、物理的な対処法や行政施策の体制不備の問題に還元されるなど、矮小化されがちである。これは都市防災全般における、災害に対処するにはハード面の防災都市計画を推進すればよいとか、災害時に国、自治体、自衛隊や警察・消防が対応できる体制を整えればよいといった問題矮小化と軌を一にしている。

しかしながら、都市防災にしる被災史料保全にしる、根本的な解決を図っていくうえでは、震災によっておこった現実を直視し、それに沿って本質から目をそらさず考えていくべきである。史料ネットの場合、既成概念によって活動方針を固定してしまうのではなく、奥村弘氏の「走りながら考える」という言葉に象徴されるように、現実に立脚した柔軟な活動スタイルをとったことが、普遍的課題にまで実践的に視野を広げ得た要因であったと考えている。

では、震災を通して史料保存を考える際のもっとも本質的な問題とは何か。それは、一部の指定文化財のみを保全の対象とするのならと

もかく、広く社会のなかに存在する史料・文化財を守り社会に活かしていくことを考えた場合、災害時にしる平時にしる、その保全活用は行政や専門家が請け負って解決することではないということである。そのことは、震災後の一連の事態、すなわち史料に対する市民の無関心や廃棄、ボランティアが主体となって巡回調査に乗り出さなければ被災史料情報を把握できず、その問題を行政が主体的に解決する意思も能力も満足に持っていなかったことに、端的にあらわれている。言い換えれば、市民や地域社会自身が歴史や史料の必要性を認識し、主体的に取り組まなければ、何ら問題は解決しない。

従来の史料保存論や取り組みには、この問題についての本質的理解が欠けていたと指摘せざるを得ない。従来の専門家主導の議論とは、史料保存の重要性は自明のことであり、それは欧米のごとく当然に公共的事業として行政が行なうべきものであり（実はここに誇張された欧米理解がある）、日本ではそのことの必要性が認識されていないから普及活動が必要だ、といった論理だてであった。そしてこれら全体の前提となるのは、史料保存事業の公共性である。

しかしながら現実を直視すれば、専門家が自明と考える必要性や公共性は社会にとっては何ら自明ではなく、史料保存を現実に公共性ある事業として社会的に実現していくためには、

まずその公共性を誰もがわかる形で実証し、そのことを市民社会の多数の合意とし、その合意にもとづいて社会が公共的に実施する、という手順を踏む必要がある。そして公共性が合意となり実現する場合も、それがただちに公費負担と行政の責任による実施を意味するという、従来の理解もまた見直していく必要がある。

この点は、歴史や史料の分野のみならず、現代日本社会全体のかかえる本質的な問題点である。観客型民主主義という言葉に象徴される従来の日本社会においては、市民は税金さえ払えばあとの社会形成や運営には責任を持つ必要はなく、すべての公共的機能は税金によって行政が執行すべきであり、また市民が余計な口出しすることなく行政と専門家にまかせておけば社会はうまくいく（実際それで日本は世界一、二の経済大国になった）という、社会全体としての極度に行政依存的な意識が強かった。実はこういった社会の特質こそが、人災としての阪神

・淡路大震災を生み出したと言える。そして、バブル崩壊や震災の経験を経て、日本社会においてもようやくこういった行政依存的体質を払拭し、市民自身が主体的に考え、負担と責任を負って社会に参画する機運が生まれつつある。

従来の行政依存型社会においては、市民は主体的に考え行動する前提となる実質的な歴史情報を必要とせず、歴史学や史料保存事業にその情報を求める社会的需要はごく少なかった。よって歴史学や史料保存は、自らの必要性・公共性を社会との緊張関係のなかで理由づけることができず、自明であり重要だから重要なのだという自己目的化した論理展開をとらざるを得なかった。しかしながら今後、社会に対する市民の主体的参加が実現し、実質的な歴史情報への社会的需要が生まれ、その社会的需要に立脚した歴史研究や史料保存が実現する可能性がある。

実は史料ネットが取り組んでいる、地域のなかで市民とともに歴史を学び保全するさまざまな取り組みは、こういった社会の変化に対応して、さきの を具体化していく取り組みと言える。そこにおいては、単に歴史が好きで学ぶというだけではなく、震災復興や公害被害地域再生のまちづくりに歴史を活かしていきたいといった、市民の立場からの現実との接点に対する強い意識が、共通する特徴となっている。

こういった地道な取り組みこそが、参加型民主主義にもとづく市民社会形成に対応して、歴史研究や史料保存の公共的必要性に対する社会的合意を形成し得るであろう。そして、行政依存型ではない対等のパートナーシップにもとづくこういった実践によって、おのずと市民主体、ボランティアやNPO、フィランソロピーなどに立脚した社会的な史料保存、歴史研究のあり方があきらかとなる。またそこにおいて始めて、行政自身による施策、つまりわれわれ市民の税金を投じた施策としては何が必要なのかが、あきらかとなるはずである。

また、これらの取り組みは、専門家と市民の間の双方向性に立っているところに、もうひとつの特徴がある。震災ボランティア全般においても、本当に有意義であったのは、一方的に助けるボランティアではなく、被災地の人々の努力や営みを尊重し、自立をうながし、そこから自身が学ぶ姿勢を見せたボランティアたちであった。それと同様に、行政や専門家があきらか

にした歴史を市民に学んでもらう、あるいは自明であるところの歴史や史料保存の重要性を市民に普及するというスタンスではなく、市民とともに取り組み、学ぶなかで、専門家がみずからの専門性を相対化していくことが重要である。つまり社会が歴史研究や史料保存に何を求めているのか、従来のあり方でそれにこたえ得るかどうか、みずからは専門家としてどうあらねばならないのかを、市民から学ぶのである。

こういった視点に立って、震災後の経験に即した形で、既存の史料保存や歴史研究のあり方を、根本的に見直す必要があると考えている。

なおここで述べた内容は、奥村氏の問題提起と同様に、基本的に辻川個人の問題意識にもとづくものであって、その論点はかならずしも史料ネットを代表するものではない。

(つじかわあつし、尼崎市立地域研究史料館)

— 部会参加記 —

「市民社会における史料保存 と歴史学」参加記

藤實久美子

1999年9月18日(土)に、私は日頃感じている問題を抱えて歴研総合部会の例会に参加した。

1つは「われわれとは何か」、私の帰属意識に関わる問題、2つめに歴史研究者の役割についてである。これらの点については、後に述べるように、馬場義弘氏・奥村弘氏・辻川敦氏のご報告と当日の討論を通じて、一つの道を開くことができた。深く感謝申し上げたい。

参加時、他者のことを私のこととして想像し理解できる範囲と、その回路について自覚的に意識したいと考えていた。これは、阪神・淡路大震災の被災者の方々、地域の復興に尽力される方々の姿がテレビの映像で映しだされても、正直に申し上げて、距離感があって追体験することができなかつたからである。テレビの映像と音響効果はドラマチックに過ぎて、現実との乖離が明白であった。映像の外にある実生活者の苦しみと不安は受け手に伝わりことなく終始した。また、一般に報道期間は短く継続的な視点が損なわれている。2年後・3年後、そして今後も持続する課題とそれを解決していく人々の営みの伝え手として、報道はほとんど役割を果たしていない。

とはいえ、現在のマス・メディアのあり方を批判しただけで事態が好転することはないし、またそれほどに事柄は単純ではない。やや話が飛躍するが、1998年の冬季オリンピックで日本人選手が金メダルを取り、その映像が幾度も流された。これに手に汗を握り、よかったと思う自分がいた。戦後歴史学を学んできた者として「国民国家」的統合を批判し、それに絡めとられていない一端が、帰属意識の問題、つまり阪神・淡路大震災の被災者への距離感に現れてまいかと思っていた。だが、これはまったく違った。単に辛い現実から目を背けていたのである。以来、史料ネットの活動に参加しなかった後ろめたさもあって、他者の苦しみを想像し理解すること、そこで採るべき人間としてまた歴史研究者としての行動について模索していた。そして、この問題を考えるために例会に馳せ参じた。では、以下、3人のご報告から得た点を認めたい。

1つは、史料ネットの活動は、「批判」から「学習」へと転換したという点である。これは1996年度の日本史研究会特設部会で受けた印象と大きく異なる。当時はやや活動の足りないところが強調され、そのため救援活動を支えることができた人材の養成・ネットワークの形成、歴史学のこれまでの研究蓄積を正当に評価すべきではないかといった質問が、会場からあったと記憶している。これが馬場氏の報告では、今後課題はあるとしながらも、経験と実績を評価して肯定的に前進していくというトーンがより明確にされており、報告の受け手も前向きに自己の活動を位置づけられるようになった。

2つめは、史料ネットでの活動経験が歴史学と社会とをめぐる普遍的な課題に切り結ばれる段階に至ったことである。もっとも、この点もすでに1996年の日本史研究会で奥村氏が明言されているが、受け手の側によく議論に参加できるほどの冷静さと余裕が生じたように思う。冒頭で掲げた話に戻れば、阪神・淡路大震災で「われわれ」という意識を共有できなかった。史料ネットの活動にこれまで参加してこなかった私のような者も史料ネットの方々と議論できるのだと、今回、実感した。これは単に私個人の資質に由来するものであるかもしれない。ただし、東京方面の人には少なからず上記の後ろめたさがあり、積極的に議論に参加してこなか

ったとも感じている。

3つめは、歴史研究者の職業的役割についてである。社会が歴史研究者ゆえに守ることを期待する役割行為、また学問的な知識をもつがゆえに付与する権限、あるいは義務とは何か。また反対に歴史研究者が市民に望む役割行為を可能とする環境づくりとは何かである。これはすでに歴史研究者は史料に接するという局面では、もはや市民ではなく職業人としてのみ存在することを前提としていよう。

ここで留意すべきは、辻川氏の報告にあったように、歴史研究者に期待される役割を形成しそれを実行させる主体は、現在、主として行政の側にある。また政治家や報道機関などが好んで使う「社会的要請」「社会的期待」という言葉で表現されるものがある。だが、「社会的要請」「社会的期待」の内容は不明であり、常に市民と接することで生じる軋轢から、歴史研究者が自ら発見し、分析していかなければならないと思う。

ただし歴史研究者のうち、比較的市民と接し史料保存の現場に立ち会うことができるのは、現実的にみれば、日本近世・近代・現代史の人々に限定されよう。そこで、運動を大きくするための連携の場として、法学・経済・社会学研究が想定できる。兵庫県立4大学の経済学・法律学者が共同して、阪神・淡路大震災の被災者の生活課題・地域産業の再生、都市計画などに関する研究を行っていると聞く。医業や福祉、建築など現場密着型の研究者の参加ばかりでなく、社会科学の研究者が活動したこと。全国レベルでそれが発信されたことが、(あまりに多くの犠牲のうえではあるが)阪神・淡路大震災で得た成果であったとすれば、その継続(大学の講座開設への取り組みを含む)と協同が必要となろう。「社会的要請」「社会的期待」の内容を分析して歴史研究者がそれに応え、また歴史研究者が市民に期待することを具体化していくには、この協同が極めて有効であると思える。

以上、重厚な3報告に比べて拙い参加記となってしまう。報告者および読者のご寛恕を乞う次第である。なお最後に主催者の歴史学研究会の一委員として、当日、史料ネットの関係者が多く例会に参加し発言して下さったことに心から感謝申し上げたい。(ふじざねくみこ、国立国文学研究資料館・史料館)

台湾大地震被災文化財保全の 状況についての現地レポート

奥村 弘

10月14日から17日までの4日間、神戸大学文学部および都市安全研究センターから派遣された調査団の一員として、大地震後の台湾における文化財の状況調査および現地での意見交換のため、現地に入りました。

私自身は、14日に台北市の孔子廟など文化財の被災状況を調査し、15日に震源に近い台中市および霧峰郷を訪れ、16日には、台北市の国立歴史博物館の被災状況調査および台湾大学での文化財保存についてのシンポジウムに参加し、史料ネットの経験を報告してきました。

まず全体の被災状況についての感想ですが、日本のマスコミ報道では台湾全島が壊滅的な被害を受けたかのようなイメージがありますが、かならずしもそうではないようです。台北市については、ほとんど大きな被害はなく、倒壊したビルは極めて特殊なものだったようです。ただ広い空間を持つ構造物は、ひびが入ったり、支柱がずれたりしているようで、孔子廟や国立歴史博物館にある清朝の行政庁を模した建物には、そのような被害が見られました。

15日に入った震源にもっとも近い大都市である台中市についても、全市が壊滅的打撃を受けているという状況ではありませんでした。被害は南部に集中しているようで、市の中心部は被害はあるものの、ガス・水道・電気などのライフラインは確保されています。また台北からの高速道路も損害はほとんどないようでした。交通網が寸断され、ガス・水道の復旧に時間がかかった阪神淡路大震災とはこの点で大きく異なると感じました。しかし台中市から南に10km、地震で出来た断層のある霧峰郷での被害はすさまじく、鉄筋も含めて普通に立っている家屋はほとんどないという状況でした。断層そのものも、5、6mはあり、3階から下を見るのと同じくらいの段差がありました。淡路の野島断層などとは比較にならないほど規模が大きく、震源地を中心とした被害は、地震の規模のとおり、阪神淡路大震災に比べて巨大なものでした。全体としては阪神淡路大震災と同様、台湾大地震

も被災の規模が、わずかな場所の違いで大きく異なるという点が印象的でした。

台中市では国立台湾美術館の被災状況を調査しましたが、震源に近いだけに、収蔵庫などに大きな被害があり、外壁のタイルもあちらこちらではがれており、建物の真下にいることは危険な状況でした。館では、神戸大学文学部の美術史の大学院生で、かつてこの館にお勤めだった陳日熊さんの案内で収蔵庫を見学し、典蔵組組長の薛燕玲さんと意見を交わしました。収蔵庫内の周密絵画庫は上部が固定されており、かなり損傷が激しかったようです。また和筆筒型の収蔵庫は、引き出しが衝撃で開き、収納物が飛び出るといった状況になり、訪問した時には、鍵をかけることができるように改造されていました。大地震後、余震が続いており、そのなかでいかに収蔵品を守るかが極めて重要な課題であるとの説明を受け、日本における展示物や収納庫の免震について意見を聞かれました。

今回訪れたところで最も被害の大きかった場所は、先述の霧峰郷で、ここには18世紀中頃に台湾にわたり、台湾有数の名望家になった、梁啓超とも関係の深い林家の広大な邸宅があります。長い間荒れていたこの邸宅は、最近になって多くの人の共同作業で修復が進められ、完工に近づいていたのですが、地震によって完全に倒壊、瓦礫の山と化しました。現地では、重要な文化財が盗難にあわないよう、敷地はトタン板でかこまれ、軍隊が常駐していました。また林家のご子孫の高齢の方が、保全のために地震後ずっとその場に常駐している姿が印象的でした。邸宅前の広場は、被災した住民の方々に解放されており、テントが多数見受けられました。

林家の見学は、現地では文化財保全を進めている台中市東海大学教授、台湾現代史を専攻する劉超さんの紹介で実現したものです。劉さんは、現地を詳細に案内して下さっただけでなく、台中県全体の建築物を中心に文化財の被害状況について、概略を教えてくださいました。東海大学を中心に、建築・歴史系の人々によって被

害調査がすでに行われており、その一覧表を見せていただきました。一覧表には、文化財に未指定のものもあげられており、調査はかなり広範に行われたようです。断層線にそって劉さん自身が撮影された写真を見せていただきましたが、そこでの歴史的建築物はほとんど全壊といってよい状況であるとのことでした。なおこの活動の際、阪神淡路大震災の建築系の活動の総括が台湾で翻訳され、役に立ったとのことでした。

こちらから何か援助ができることがないかと劉さんに聞いたところ、劉さんからは二つの点での協力を依頼されました。ひとつは、文化財を保全し、復旧していくことが震災復興において大切であるという意見を日本から台湾に向けて発信してほしいという点でした。劉さん、それらから劉さんを紹介して下さった東海大学日本学教授の林珠雪さん、通訳をお願いした神戸大学の日本史の大学院生の楊素霞さんと意見交換を行うなかで、台湾では日本以上に文化財保存について社会的合意が作りにくい状況にあることが私にもおぼろげながらわかりました。

古い建築物を壊し、新たな市街が次々と建設されており、それを是認する雰囲気強いことなどは、日本と同様もしくはそれ以上なのですが、それ以外に台湾の特質として、教育の中の「国史」は大陸の歴史であり、台湾各地のことは最近までほとんど教えられないということがあげられます。ここ数年、政治状況の変化の中で、台湾の歴史や文化が学校教育の中に取り入れられ、社会的にも関心が高まってブームになりはじめたところのようです。したがって、地域の文化財を価値あるものとして保全するという点で、日本とはことなる困難があると強く感じました。文化財保全活動に特化したカンパなどについても議論したのですが、被災者の感情からみるならば、なかなか提起しにくいのではというのが劉さんの意見でした。また被災地では行政の文化財担当者が、その保全復旧についてかなり弱気になっているとも述べられました。

これに関連して第二の要望は、建築物を中心として文化財復旧のための日本の専門家のアドバイスをほしいというものです。林家の場合も同様なのですが、断層近くで倒壊した建物については、もう一度復旧しても、同じような建築ではまた倒壊してしまうので、復旧しても仕方がないという意見が強くあるとのことでした。

地震が来ても壊れないような復旧の方法を教えてほしいということを強調されました。この件については、帰国後、調査団団長の神戸大学文学部教授の百橋明穂さんから、東京の国立文化財研究所に伝えていただきました。

16日の台湾大学でのシンポジウムでは、災害と文化財保全をテーマに、神戸市立博物館での経験を同館学芸員の成沢勝嗣さんが、イタリアでの震災後の文化財復旧について神戸大学文学部助教授の宮下規久朗さんが話され、私は、阪神淡路大震災後の史料ネットの活動について紹介しました。また大阪経済大学助教授の長田寛康さんと神戸大学文学部教授の鈴木利章さんが震災時の大学における対処について話をされました。台湾側からは、台湾大学の教員学生や各地の美術館博物館の館員、政府機関の関係職員など、五〇名ほどが参加されていました。

私への質問は、余震が続く中どのような形で活動を行ったのか、保全した被災史料はどこにどのように保全したのか、なぜそのように早く活動が開始できたのかなど、現在台湾がおかれている状況と関連する質問が多く寄せられました。震災後の生活復旧の中で、文化財の問題をいかに位置づけるのか、台湾でもこのことが大きな課題となっていることを強く感じました。

今度の調査を通して痛感したのは、私たちが、欧米の災害や戦災後の文化財保全について情報を集めた以上に、地域的にも近接する日本の例は台湾での震災後の文化財保全に大きな影響を与えていることです。劉さんからは、別れ際に日本で、震災後の文化財保存がしっかり行われなければ、台湾でもいっそうむずかしくなる、ぜひがんばってくださいと、逆に励ましを受けたことは、今も心に残っています。これまで自分たちの活動の国際的な意味を考えたことはほとんどなかったのですが、この調査全体を通して、阪神淡路大震災の持つ、二〇世紀後半における大都市直下型地震としての世界史的な意味をもう一度再認識させられました。

(おくむらひろし、神戸大学文学部助教授、史料ネット代表幹事)

史料ネットでは台湾での文化財の保全活動に対して、出来る限り支援活動を進めていきたいと考えています。皆さんからの、この問題についての情報やご意見をお待ちしていますので、ぜひお寄せください。

**兵庫津の歴史研究、新しい段階に
震災後に調査された中世・近世遺跡の発掘成果を検討
藤田明良**

近年、博多や堺、草戸千軒や十三湊など、中世港湾都市の学術的解明・復元が、急速に進んできている。だが兵庫津は、中世の要港であり『兵庫北関入船納帳』をはじめ諸史料に恵まれているにも関わらず、その解明・復元は他所に大きく遅れをとっていた。これまでの埋蔵文化財調査で、中世に遡る住居遺構などがほとんど出ていないことがその理由であったが、ここ2～3年間に実施された復興事業に伴う調査で、中世の遺構・遺物が出土し、港や街並の解明に光明がさしてきた。だが諸般の事情でその成果は、一部が「調査年報」などで公表されているに過ぎず、研究者や市民に広く公開されているとは言いがたい。

史料ネットではこれまで、幾つかの現場で見学会を企画して、市民や研究者の関心を喚起してきた。さらに学術的な検討を本格的にスタートさせるため、さる10月3日(日)六甲勤労市民センターで、ネットと密接な関係のある科研「被災史料保全活動からみた都市社会の歴史意識」研究会が、研究者による調査成果検討会を実施した。

まず兵庫県教委埋蔵文化財調査事務所の岡田章一氏が、「阪神バイパス」沿いの共同溝埋設に伴う6m×600mの帯状の中世遺跡について報告。多数の柱穴や井戸跡が切り合いながら出土、密集性と建替えの頻繁さを特徴とする都市的な遺跡であり、さらに倉庫の土台を想定させる石敷き遺構や、備前産など外部から搬入された焼物

や銭さし等の遺物など、港町に相応しい様相を示すことが明らかにされた。検討会では、当調査区は中世兵庫の町の北西部分を斜めに横切る形になっており、13世紀後半以降の町の拡がりの変遷がたどれる貴重な遺跡であることが確認された。

つづいて神戸市教委文化財課の内藤俊哉氏から、海岸に近い宮前町の建設工事に伴う調査区について、13世紀後半～19世紀にかけての遺構面を検出、近世の火災(宝永の大火)の焼土層や慶長大地震による噴砂跡、さらに倉庫跡を思わせる石敷き遺構や大量の貿易陶磁も出土したことが報告された。検討会では、中世～近世の生活面の変遷が追える遺跡であると共に、中世街区の方向を解明する手がかりになることや、出土物からみた国際的性格に注目が集まった。

当日は文献史側からも、神戸大学大学院の森田竜雄氏や神戸深江生活文化史料館の大国正美氏の詳しいコメントがあった他、堺の埋文関係者や中世流通史の専門家も顔を見せ、時間が不足するほど活発な議論が行なわれ、兵庫津の歴史解明の新しいスタートに相応しい場となった。さらにこの日の成果をもとに、10月31日(日)に市民学習会を開催することになり、終了後の茶話会ではその準備に話がはずんだ(市民学習会については次号で報告予定)。

(ふじたあきよし、天理大学国際文化学部助教授、史料ネット事務局長)

**地方史研究協議会
大阪大会に参加して
大国正美**

地方史研究協議会の大会が10月16、17の両日、堺市で開催された。自由論題3本、共通論題10本の報告、公開講演として乾宏巳大阪教育大学名誉教授、脇田修大阪大学名誉教授が講演した。

史料ネット関係者として大手前栄養文化学院の川口宏海さん、大阪大学の寺田匡宏さん、公害地域再生センターの片岡法子さんが報告。三氏の報告とも、内容的に史料ネットの取り組みと関

連が深く、あるいは活動に参加するなかでの問題意識に立ったものであった。また会場では、史料ネットとしてレターの配布や募金のお願い、近く出版される関連出版物のPRなどを行った。

川口さんの報告は、近世伊丹郷町の発掘成果を大坂、堺、枚方宿と比較、伊丹郷町は大坂や堺と異なり、在郷町型の発展をしていると結論。最近近世以降の遺構の発掘を地域の特性に任せ、事実上発掘の必要性を後退させる行政側の動きを批判する立場から、豊かな成果を報告した。

寺田さんの報告は、近世の灘酒造業と水車業の関係を題材に産業の展開、開発は社会にどういう意味をもったのかという問いに迫った。討論では司会者が、寺田さんを史料ネットの中心メンバーと紹介し、ネットの活動を通じた方法論の深化や、足で歩いて研究主題を見つけることの重要性を強調した。

片岡さんの報告は、西淀川の大気汚染と住民運動を取り上げ、大気汚染の要因や特色、反対運動の展開過程などをあきらかにした。討論では、行政まかせでは追いつかない現代史料の保存について、所蔵者自身による保存、研究者と所蔵者との対話、そのプロセスを通じての方法論の深化などを指摘した。

史料保存問題では、大国が史料ネットの立場で会場から発言する準備もしていたが、日程が大きくずれ込み討論時間が大幅短縮され、残念ながら会場からの発言は打ち切られた。

なお大阪大会の実行委員会からは、今後も準備会で培った関係を生かしたいので、史料ネットに参加してほしいと要請があった。

(おおくにまさみ、神戸深江生活文化史料館副館長)

文献情報

歴史資料ネットワーク編 『歴史のなかの神戸と平家 - 地域再生へのメッセージ - 』

(発行：神戸新聞総合出版センター) ついに刊行!!

被災地・神戸の地域史に新たな光をあてる史料ネット編集の本書が、11月20日(土)、ついに刊行される。上製・四六版、270頁で、定価は1,800円(税込1,890円)。

内容は3部構成で、第一部「平清盛と福原京の時代」は、1997年9月13日に開催した市民講座の内容が中心。当日、聴衆に熱い感銘を与えた永井路子「平家物語の時代と神戸」は、宮廷政治における女性の役割と、新時代を象徴する海上流通という独自の道具立てで、この時代がもつメッセージを鮮明に現代に届ける。足利健亮「清盛時代の大輪田泊と福原、和田京」は、新都構想を明解にした自説を、根拠を示しながら詳述、須藤宏「地中から語る清盛の時代」は、自ら調査した祇園遺跡を中心に、考古研究の最前線を紹介している。さらに本書のために書き下ろされた2編、国際的視野からの新しい平氏像を示した高橋昌明「福原の夢 清盛と対外貿易」と、独創的解析によって歴史文学から世相に迫る保立道久「神戸と方丈記の時代」が加わり、この時代の歴史像が生彩をもって再現されている。

一つの時代を多角的に描いた第一部に対し、第二部「地域遺産から見た神戸の歴史像」は、市民講座でスライド「清盛の時代と現代をつなぐ」を上映したメンバーが執筆、駅伝のようにタスキをつなぎながら、歴史の道を現代まで駆け抜ける。坂江渉「古代国家と神戸の港」は、旧社に着目して古代港を復元、そこでの儀礼から神戸の「国際性」の淵源を探り、藤田明良「清盛塚石塔と鎌倉時代の兵庫津」は、石塔建立の背景から港をめぐる政治・社会動向を描く。同「『入船納帳』と兵庫津の街並」は、兵庫津の港湾機能や景観、住民動態などを追究、森田竜雄「関屋町と中世の港湾管理」は、入港税徴収の変遷を追い港湾管理を巡る中世の角逐に迫り、さらに藤田「禅宗寺院と国際交流」は、禅宗寺院から清盛以後の対外交流の復元を目指す。

以上5編が、清盛の時代以外にも古代・中世の豊かな歴史の水脈が流れていたことを示したのに対し、以下4編は近世・近代の地域史、とりわけ災害や歴史認識の分野に、新しい問題を投げかける。大国正美「古記録にみる近世初頭の被災と復興」は、古文献を博捜し慶長大地震を克明に復元、同「名所記にみる平家伝承の定着」は、青葉の笛などの平家伝承が、地域で変容・定着する過程を追う。奥村弘「神戸開港と都市イメージ」は、「文明都市」としての神戸

をめざす運動が、貿易ライバルへの対抗策だったことを検証、さらに同「みなとの祭りから神戸まつりへ モダンな都市神戸の成立」は、国家と地域の間で揺れ動く中から、戦後のモダンなイメージが生れる過程を追う。

私たちがこのタスキにこめたのは、地域の歴史情報源としての文化遺産、すなわち地域遺産の大切さを市民と共有したいという思いである。終章「地域のなかの遺産から歴史を考える - 地域史研究への誘い -」は、私たち史料ネットの活動を振り返るとともに、震災後に生まれてきた「地域史研究」の新しい動向を紹介している。研究者にとっての歴史資料と市民にとっての地域遺産が、一体となっていく社会が必要ではないだろうか。大震災から5年の歳月がたとうとしている今、私たちは被災地からそんなメッセージを込めて、この本を送り出したい。

よみがえる兵庫津の歴史と街並み - 震災後の発掘調査と新出史料から -

連続市民学習会のお知らせ

ミナト神戸の歴史的原点ともいえる兵庫区の兵庫区地域では、震災後の発掘調査や史料保存活動のなかで、新しい遺構や史料の発見が相次いでいます。この成果を広く紹介し、21世紀にむけた市域遺産の保存活用、歴史を活かした街づくりについて、共に考えていく契機とするため、史料ネットでは連続市民学習会を開催していきます。

第2回「近世の生活空間と災害」

日時 1999年12月19日(日) 14:00~16:30(開場13:30)
場所 フェニックスプラザ(震災復興館) 三宮駅より南に徒歩3分
講師 内藤俊哉氏(神戸市教育委員会文化財課)「出土した街並みと災害の跡む」
大国正美氏(神戸深江生活文化史料館)「近世の兵庫津の景観と街並みの発展」
参加 申込不要、参加費無料 主催 歴史資料ネットワーク
展示 写真パネルと兵庫津遺跡出土の近世遺物(数点)

第3回(近代編)は、2000年1月23日(日)の予定。

お知らせ 尼崎戦後史聞き取り研究会主催 尼崎市内近代建築ウォッチング

日時 1999年11月28日(日)午後1時 阪神尼崎駅改札口集合
見学コース 阪神尼崎駅~阪神尼崎倉庫~城内(旧尼崎警察署ほか)~開明町~
(東難波)尼崎教会(旧上村市長邸) 午後5時ころ解散予定です。
案内 川島智生氏(建築史家) 参加費 資料代実費(100円以内)をいただく予定です。
申込先 地域研究史料館内、尼崎戦後史聞き取り研究会(Tel06-6482-5246 Fax06-6482-5244)

このニュースは、NIFTY-Serveの歴史フォーラム・歴史館2番会議室「地域史情報室」に、“曾根崎新地のひろ”さんに転載していただいています。
史料保存関係のホームページ「Archivist in Japan」を開設している小林年春さん
のご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに掲載していただいています。
<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists/>
または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No. 18 1999.11.16(火)
編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学文学部内 TEL/FAX078-803-5565 e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp